

[書評]李善恵『賀川豊彦の社会福祉実践と
思想が韓国に与えた影響とは何か』

岩田三枝子

キリストと世界 29号抜刷 2019.3.1

[書評] 李善恵『賀川豊彦の社会福祉実践と 思想が韓国に与えた影響とは何か』¹

岩田三枝子

(東京基督教大学准教授)

本書は、韓国人の牧師であり社会福祉学研究者である著者による、韓国における社会福祉という枠組みからの賀川論である。

明治、大正、昭和期を通じての社会活動家であり、キリスト者であった賀川豊彦(以下、賀川)については、1960年の賀川没後から60年近くが経過した今日、日本国内において、協同組合論等の分野での再評価が試みられている。一方で、生前、日本国内だけではなく、アジアをはじめとする世界各地での講演活動を行うなど著名であった賀川であるならば、世界における賀川の活動と思想の再評価も必要である。しかし、賀川の活動は多面的であり、協同組合、農業、教育、神学等に及び、その全体像を把握する作業はたやすくはない。

そのような研究状況の中で、社会福祉の枠組みに焦点を当てつつ、韓国における賀川の再評価の試みは興味深い。著者は、日韓の社会福祉には、社会福祉の礎石を築いた先駆者の中にはキリスト者が多いという共通点があると述べ、そのような共通項の中での賀川の実践と思想の韓国における影響を浮き彫りにしようとする。本書を通して、賀川の実践は「宗教と社会を繋ぐ」ものであり、賀川の生涯のそのものが「信仰と実践の調和」であるという視点が貫かれている(3頁)。

序章では、韓国での賀川研究が2009年の「賀川献身100年」を機に開始したものの、まだ十分ではないことを先行研究から指摘し、その研究の必要性を示す。

続く第1章では、福祉社会的かつキリスト教的な賀川の活動の中の代表的取り組みとして「救霊団」「本所基督教産業青年会」「農民福音学校」を取り上げ、また思想については『死線を越えて』や『農村社会事業』などの著作を中心として、明治期から昭和期にかけての賀川の活動と思想の意義を社会福祉の分野から検討してい

1 李善恵『賀川豊彦の社会福祉実践と思想が韓国に与えた影響とは何か』ミネルヴァ書房、2017年

る。そして、賀川の活動と思想の中心的要素は「生命」「労働」「人格」とであると結論づける（60頁）。

第2章以降では、いよいよ著者の母語である韓国語を駆使して、賀川と韓国との関連についての考察が始まる。第2章と第3章では、『東亜日報』『京城日報』といった韓国で発刊された新聞、また賀川自身が執筆した随筆や小説等を元に、賀川の訪韓の日毎の足跡を丁寧にたどる。賀川の訪韓は1920、1924、1929、1938、1939年に行われたが、特に1939年の約20日間に渡る訪韓時に行われた講演活動に関して、集会名に加えて、講演のタイトル名、その内容要約、さらには聴衆人数までが詳細に記録されている。このように賀川の韓国での講演活動内容について細部まで本書で報告されるが、それに比較すると、賀川の講演を聴いた韓国人聴衆側の応答については割かれている紙面はわずかである。検討材料としての資料が不足しているということなのかもしれない。著者による賀川の講演要約をみる限り、賀川の講演内容は日本でも韓国でも顕著な違いはないようであるが、日本人と韓国人での聴衆の反応や関心の相違などの解明も含め、今後の新資料の発見が期待される。

さらに、第3章では韓国語に翻訳された賀川の著書や、賀川に関する韓国語の新聞記事などについてまとめられている。いつの時代にどの賀川の著書が翻訳されたのかの一覧表が付されており、興味深い。一方で、韓国出版事情の予備知識の少ない読者に向けて、韓国人翻訳者や出版社の背景に関する解説があると理解の助けになる。例えば、翻訳書の出版社の傾向によっては、賀川の翻訳書がキリスト者を主なターゲットとしていたのか、それとも別の層を対象としていたのかといった推測をすることも可能となる。また、その翻訳書に対する書評等なども発見されればさらに興味深い（120頁）。賀川に関連した新聞記事の分析では、韓国における賀川のイメージが、「労働運動の代表者」から1930年代以降は「キリスト教の伝道者」「社会事業家」へと変化していくと著者は指摘する（124頁）。

第4章では、賀川の社会福祉の分野における活動と思想が、韓国の社会福祉の領域においてどのような影響を与えたのかが、韓国のキリスト教社会福祉の分野で活動した人物を取り上げて検証される。特に、障害者福祉に携わり、指導者育成のために1956年に大邱大学を創設した李永植（1894-1981）、1920年代から40年代にかけて農村における農民組合の必要性について発言し、朝鮮農民福音学校の活動を展開した劉載奇（1905-49）、そして戦前の1942年に同志社大学を卒業し韓国で初めて「社会事業学科」を設置した金徳俊（1919-92）の三人に焦点をあて、各人が執筆した一次資料を元に賀川の活動と思想から受けた影響が検討される。分析の結

果、神戸神学校の賀川の後輩にあたる李永植は、賀川が活動する神戸のスラムを訪ねたこともあり、その実践的側面に影響を受けているとする。また劉載奇の主張した「愛神、愛土、愛労働」は、賀川の「愛神、愛隣、愛土」の思想を韓国の状況に文脈化したものであるとし、金徳俊は、社会福祉実践には「生命の本質」「生命の表現」の両面が不可欠であるとする賀川思想から影響を受けている、と結論づける。さらに、3名は、賀川とは異なる時代状況におけるニーズに即して賀川思想を實踐している、と評価する。これらの韓国語文献を精査しての分析は貴重である。これら3名の韓国人が賀川から何らかの思想的インパクトを受けたことは著者の分析から認められる一方で、「韓国における賀川の影響」と呼ぶに十分なダイナミックさを掘り下げる議論の展開を今後期待したい。

本書は、賀川の日本における活動と思想が、韓国のキリスト教の社会福祉分野の活動家にどのような影響を与えているかを検討するものであり、賀川が韓国の社会福祉分野で直接的な活動を展開した、ということを示すものではない。そのため、もし読者が、賀川が講演活動以外の領域では韓国でどのような活動を展開したのか、また直接的にどのような人格的関わりが韓国人との間にあったのかを記されていることを期待して本書を読むならば、期待に反して、賀川と韓国との関連はむしろ薄いと感ずるかもしれない。また著者自身も今後の課題に記しているように、韓国と賀川の間さまざまな影響を、韓国側だけではなく賀川側からの解明も求められるだろう。

また本書では、キリスト教社会福祉の領域で賀川思想が韓国に与えた影響を検討しており、キリスト教の領域の比重が高いが、本書タイトルからはキリスト教の視点は見えづらい。韓国における福祉分野が主にキリスト教界を中心に展開されたということであれば、韓国における社会福祉の状況には必ずしも詳しくない読者のためにも、韓国の社会福祉に関する基礎的知識が簡潔に提供されていると、さらに理解の助けになるかもしれない。

本書では、著者は賀川の活動と思想の大部分に同調的である一方、例えば第3章に記されたような賀川の韓国に向けられた「上から目線」に対する違和感（105頁）や、1939年賀川の訪韓時の礼拝において「皇国臣民誓辞」の斉唱が義務付けられているにも関わらずその点に賀川が言及していないことへの疑問、さらに賀川の訪韓が日韓キリスト者の交流を活発にする一つの契機である一方、その訪韓はキリスト教の皇民化政策によって結成された朝鮮キリスト教連合会の招きによるという歴史の皮肉などを取り上げる（85頁）。韓国の視点に立った著書の指摘を、日本の読

者は真摯に受け止めるべきである。

韓国のキリスト教社会福祉史の分野に焦点を絞り、韓国語の一次資料を詳細に分析し、日本語で紹介した本書の価値は高く評価されるべきものである。本書では全編を通して、賀川の訪韓日程表や賀川思想の図式など、筆者作成による図表が付されており、理解の助けになる。賀川の活動や思想が韓国のキリスト教社会福祉の分野でどのようなインパクトを持っていたかについて、本書を通して多くの示唆が得られた。

著者によれば、2009年の賀川献身100年以降、韓国における賀川研究の機運が少しばかり高まっている、という。賀川の活動と思想が、韓国のキリスト教福祉史の中でいかなるインパクトを与えたかに加えて、韓国の現代的な文脈の中でどのような意義を持つのかについても、著者からのさらなる提言を今後期待したい。